

報告



第39回 日韓技術士会議

技術士（建設部門） 市村 一 志

1. 会議の概要

第39回日韓技術士会議は、2009年（平成21年）10月7日から9日まで仁川（イッチョン）市で開催された。仁川市は、ソウルから西へ約35kmに位置し人口260万人の港湾都市である。仁川国際空港は、2001年に供用され韓国の玄関口となっている。会場は、ハイアット・リージェンシー・イッチョンホテルで空港ターミナルの直ぐ向いにある。

会議のテーマは、主催国の韓国側から「低炭素緑色成長時代における技術士の役割」が提案され、地球気候変動のためのCO₂削減が言われている折、日

本側も受け入れて、基調講演、分科会に対応することになった。参加者は、技術士、同伴者、事務局を含めて日本側が101名、韓国側が257名、計358名の大勢の参加となった。

下の図に簡単に位置関係を示した。ハブ空港の仁川国際空港、開通直前の仁川大橋、民間投資による建設中の副都心が集中して、韓国の中でも最も注目されている建設ラッシュの地区である。一方では、この近くの川では(地図の右上方向)、上流の北朝鮮のダム放流により、下流の韓国側で洪水が起こり死者を出した付近でもある。



3日間の日韓技術士会議の主な内容は次のとおりである。

月 日	行 事 内 容
10月7日 プレイベント	日韓親善サッカー大会
	日韓女性技術士シンポジウム
10月8日 本会議	式典
	基調講演
	分科会
	友好親善晩餐会
	両国同伴者ツアー
10月9日 産業視察	仁川大橋現場見学
	仁川世界都市祝展見学
	仁川都市計画館見学
	現代製鉄仁川工場見学

会議全体の運営は、39回ともなれば手馴れたものでスムーズな流れで進行された。次回第40回は下関市で開催することで、中・四国支部の技術士の皆さんが歓迎の意を示して散会となった。詳細の内容は、「技術士12」を参照されたい。

以後、隣の韓国がどこに向かって進もうとしているか、今回の会議参加で意に止まったことの幾つか感想を述べてみたい。

2. 仁川国際空港

会場となったホテルに宿泊してわかることは、真夜中も飛行機が切れ間なく飛んでいることである。旅客サービスは午後11時頃に終了しているので、明らかに貨物機の運行である。

仁川国際空港は、滑走路3,750mが2本、4,000mが1本、更に4本目として2020年(平成32年)を目処に4,000mの整備(敷地は確保されている)が予定されている。貨物取扱量は既に成田国際空港をぬき、旅客数も近年中に越えるものと予想されている。急速にハブ化した理由は、滑走路等の基盤が整っている上に、着陸料が成田の1/3程度で、利用者にとって低価格の航空運賃になっていることである。仁川国際空港の2001年の開港で、それまで利用していた金浦空港は、国内線専用の役割分担をした。しかし北京、上海、羽田・中部・関西の各国際空港との短距離国際路線に絞りビジネス客の取り込みを図る役割分担の見直しを行い、仁川・金浦空港の機能の再連携で、更なる競争力の向上で優位に立とうと

している。

会議から帰ってきて日本で話題になっていた一つが羽田空港のハブ化であった。今さらと思うが成田と羽田の関係見直しが始まろうとしている。日本は民営化自体が遅々として進まない時代遅れの感を呈している。利用者にとって見れば、便利で安い方(もちろん安全は前提として)を選べばよいことで、日本の航空会社が仁川国際空港をハブ化して、世界へ飛び立つことも十分考えられる、と醒めた目になってしまう。

3. ソウルの副都心建設

副都心は、仁川国際空港とわずか15分で結び、209平方キロの広大な埋立て敷地に、国際ビジネス、IT・バイオの最先端研究拠点、物流拠点、観光・レジャー、教育、住宅などの都市機能を揃えた人口50万都市を2020年までに建設するとして、現在建設ラッシュである。見渡しただけでもクレーンが30本以上林立していた。

その中でも、韓国の初の経済自由区域となる「松島国際都市地区」は、副都心の象徴とも言うべき仁川タワーが建設中である。仁川タワーは、世界第2位の高さの151階建て2013年(平成25年)に完成予定である。



副都心の中心となる「松島国際都市地区」の模型

韓国がなぜここまでしてこのプロジェクトを推進するのか、過去に日本であった建設バブルとは違う凄まじさを、韓国の技術士の皆さんから疑問を呈する人はいなかった。この副都心建設の資金総額は把握できなかったが、米国や英国の民間資本の投入がほとんどである。なぜ海外の投資家が莫大な資金を

拠出するのか、いろいろ話を聞いて感ずるのは、韓国政府の決意あるビジョンと仁川市の必死な誘致であると言わざるを得ない。そこまでして実行する背後には、大国の日本と中国に挟まれた地域（国家）間の競争に生き残るための戦略であるのかもしれない。基盤的な戦略として、前述している仁川国際空港、この副都心、釜山港湾、ガスパイプライン、日本海横断海底道路（鉄道）、首都ソウル政府機能の移設が考えられる。

4. 仁川大橋

この時期のソウルは天気がいいと言う。当会議の期間中も快晴の日が続いた。飛行機から見る開通前の仁川大橋は陽に映えて美しい。産業視察で10日後に開通する仁川大橋を特別見学することが出来た。この見学は今回の会議の楽しみの一つでもあった。



着陸直前の飛行機から見える開通前の仁川大橋

仁川大橋は、2005年（平成17年）7月に着工して4年余をかけて建設された。全長21.4km、橋梁部分18.4km、長大橋部分800m・高さ230m、幅6車線の規模である。工事費は2兆4,500億^㉙（100^㉙8円として1,960億円）、ディペロッパーは、イッチョン・ブリッジ^株とコリア・エクスプレスウェイ^株で外国資本が入っている民間会社である。規制緩和を受けて建設された民間の橋ということになる。どう収支を考えているか尋ねたところ、一台当りの通行料は6,000^㉙（480円）、1日38,000台の通行量を見込んでいる。計算すると1年間の収入832億^㉙となり約30年で回収することになる。国の補助や副都心等周辺開発との係わり、仕組みをいろいろヒヤリン

グしたがよくわからなかった。

仁川大橋の建設で仁川国際空港とソウルなど首都圏のほとんどの地域とは1時間台で接続可能となる。



仁川大橋の中央付近、遠望の左側は仁川国際空港

5. 韓国の冷蔵庫

今回、印象に残る日本の青年技術士に会った。電気電子部門出身で某日本電機メーカーを辞め、現在韓国に在住し、韓国大手電機メーカーに勤務している青年である。冷蔵庫の設計をしていると言うので勢い冷蔵庫の話しになった。私は生来こういう未知の話は大好きで質問攻めにしてしまった。まず、冷蔵庫の生産台数の話になり、韓国大手電機メーカーは世界で約500万台の生産販売を行っており、日本の東芝、日立、パナソニックが束になっても敵わないらしい。なぜそんなに強いのか、どういうやり方をしているのかと質問を続ける。日本よりデザインがよく、販売戦略が凄いらしい。腑に落ちないので質問を続ける。「地域専門家制度」というのがあって、グローバルな人材を育てるために、一年ほど海外で自由に遊ばせ、やがてその地に住みついて文化や習慣を習得し、現地の望む商品の開発に結びつけることを徹底的に行っているらしい。韓国の製品はすでに、安い（この言葉の裏には多少品質が落ちる）から品質やマーケティングを兼ね備えた総合力や実行力を持っていると言う。

翌日、マーケットに行き冷蔵庫を見た。第1印象は日本より大きいことである。観音開きで日本の一般家庭の2倍ぐらいいはある。しかも扉には派手な花や樹木等が描いてあって快適性を考慮した存在感

を示す。これを見てデザインの考え方がまず違ふと感じた。日本の冷蔵庫は必ず台所（付近）にあって、余り目立たなく邪魔にならないコンセプトに対して、韓国のそれは、居間の中央において部屋や家のステータスになっている様である。更にキムチ用の冷蔵庫も売っていた。これらのコンセプトが韓国では歓迎され、恐らく各途上国に対しては、それぞれの好みに対してきめ細かくコンセプトを立て販売しているのではないか。

話を戻して、日本の青年技術士に質問を続けた。省エネの問題である。日本の冷蔵庫はいかに省エネをしているかが、選ぶ時の大きな価値観の一つであるが、その点はあまり考慮されていないと言う。見た目や機能が重要視され、省エネ対策はこれからだと、意外な返事が返ってきた。そう言えば韓国全体でも、日本ほど省エネに対する関心が低い様に思う。韓国は中国の安いコストで追いつけられ、日本の技術で先を行かれ、そのサンドチッチだと言った経営者がいた。今や戦略商品が日本を越える時代になって、キャッチアップ経営から自ら先を行かねばならぬ規模にまで成長しており、いずれ省エネの問題もクリアするであろう。

6. 清溪川（チョンゲジョン）

秋日和にソウル市民の川に復元した清溪川を散歩した。復元整備は、昔、都市の貧民が住居する川であったが、その後、川を埋めて建設された高架道路も完全に撤去して、2005年9月に完了し、更に周辺の再開発を行い、街の活気と市民の誇りを取り戻した川である。清流と遊歩道の5.7Kmの整備で、河川による分断を避けるために22本の橋を建設し、両側の商店街の振興を図り、眺望スペースや遺跡を残す工夫もしている。各橋のデザインは、渡る人々がいろいろな視点を楽しむことができ、近代的なデザイン、木製の橋とさまざまな工夫がなされている。高架道路の脚部3本を残し噴水のトンネルで演出して後世へのメッセージとし、河川湿地を残して生物の生息空間を造成している。

周辺地区は、様々な高層建築が建設中で、焼肉店等の観光客をターゲットとした飲食店街が集中しつつある。行った日は日曜日で、韓国の観光客（一見して



日曜日の清溪川、市民で大変な賑わいであった

韓国人とわかる）が大勢散歩や飲食している安らぎの川になっていた。太鼓や摺り鉦がリズムよく聞こえてくるので、音を頼りに行くと仏閣の前の広場で、お祭と言うことで韓国衣装を着た踊り子が激しく舞っており、時折周りの人々も参加して、何か懐かしい感慨になった。主催者の人の良さそうな老人が近寄ってきて、私を日本人とわかるらしく何処から来たか尋ねた。札幌からと言うと「私も札幌で行ったことある、きれいな街だ」と相好の顔になり、団子をご馳走してくれた。人のこころも穏やかと感じた。



清溪川ほとりの古い建物、広場の前で踊る人々

以上で会議に参加して、最近の韓国の感じのままを述べる機会を頂いたことに感謝する。

次回第40回日韓会議は、2010年（平成22年）10月16日（土）から18日（月）まで山口県下関市で行われる。第40回を記念して記念誌を発行する予定で、原稿募集（8,000円/枚の費用が必要）は2月末まで、本部まで応募して欲しい。